

Ⅲ 意識調査の結果と考察

1 「思春期の心理」の分析

(1) 因子分析の結果

「設問Ⅰ」について、有効データ(3,045名)に因子分析を施した。その結果、表3に示す6因子を選んだ。これらの因子に対応する項目として、次の基準から適しているものを選び、その上で因子の命名を行った。

- i 因子負荷量が0.40以上であること
- ii 他因子の負荷量が0.36以下であること
- iii 項目間相関が低いこと

加えて、項目選択の状況をとらえるために、因子得点として数量化してとらえようとした。4件法の各項目に対応し、そう思う：3点 少しそう思う：2点 あまり思わない：1点 思わない：0点を配点し、各因子得点を算出した。

命名した6つの因子の名称（「 」内）と内容を、次に示す。

① 第1因子：「不安・抑うつ感」因子

「人からどう思われるか気になる」、「悲しい気分になることがある」等、7項目から成り、自我の形成期である思春期において、自分自身に関する、また他者との関係における不安や葛藤のあり様をとらえる因子である。

② 第2因子：「家族親和感」因子

「つらいときはげましてくれる家族がいる」、「大事なことは家族と相談して決める」等、5項目から成り、家族の中で支えられ、安定・安心していただけるかどうかをとらえる因子である。

③ 第3因子：「自己肯定感」因子

「自分は何でもうまくやれる」、「自分のすることには自信がある」等、4項目から成り、自己のあり様について、肯定的な方向でとらえていることを示す因子である。

④ 第4因子：「攻撃性」因子

「自分のやり方を注意されると、反発したくなる」、「物事がうまくいかないと頭にくる」等、5項目から成り、攻撃的な方向を示すエネルギーのあり様をとらえる因子である。

⑤ 第5因子：「友だち友好感」因子

「困ったとき相談できる友だちがいる」、「友だちは私の気持ちをよくわかってくれる」等、3項目から成り、友だち関係における親密な気持ちのあり様をとらえる因子である。

⑥ 第6因子：「自暴自棄感」因子

「自分はどうなってもかまわない」、「生きていても仕方がないと思うことがある」等、3項目から成り、やけになり、投げやりな気分をとらえる因子である。

表3：本調査 因子分析の結果

因子	No.	項目	因子負荷					
			F1	F2	F3	F4	F5	F6
F1 「不安・抑 うつ感」 因子	2	人からどう思われているか気になる。	0.618			0.199	0.113	
	6	悲しい気分になることがある。	0.540			0.212		0.166
	17	悪いことが起こると自分のせいだと思ってしまう。	0.540					0.296
	25	みんなの前でうまくやれないとくやしい。	0.513	0.145	0.196	0.276		
	31	なやんだり迷ったりすることがある。	0.500	0.121		0.172	0.132	0.148
	13	何かをするとき、失敗しないか心配になる。	0.491	0.119				0.163
	24	友だちが楽しそうにしていると、うらやましくなる。	0.471	0.115		0.253		
F2 「家族親 和感」 因子	26	つらいとき、はげましてくれる家族がいる。	0.108	0.691	0.124		0.236	
	5	大事なことは家族と相談して決める。	0.180	0.659	0.125		0.119	
	14	私は家族から信用されている。		0.581	0.248		0.130	
	32	家が一番安心できる。	0.156	0.577	0.149			
	23	家族でくつろぐ時間がある。		0.569			0.133	
F3 「自己肯 定感」 因子	29	自分は何でもうまくやれる。			0.552	0.143	0.112	0.129
	1	自分のすることには自信がある。		0.178	0.529	0.166	0.150	
	7	自分は人の役に立つことができる。	0.116	0.228	0.457	0.121	0.229	
	19	今の自分に満足している。	-0.105	0.268	0.451		0.187	
F4 「攻撃性」 因子	8	自分のやり方を注意されると、反発したくなる。	0.163		0.213	0.592		
	4	物事がうまくいかないと頭にくる。	0.243			0.554	0.111	
	10	イライラすることがある。	0.360			0.502	0.126	0.180
	20	相手の言葉にすぐつかかりたくなる。	0.177		0.282	0.439		0.190
	22	めちゃくちゃな行動をしたくなる。	0.171		0.137	0.436	0.128	0.293
F5 「友だち 友好感」 因子	3	困ったとき相談できる友だちがいる。		0.182		0.115	0.632	
	11	友だちは私の気持ちをよくわかってくれる。		0.191	0.171		0.604	
	28	友だちといると楽しい。	0.154	0.136	0.166		0.513	
F6 「自暴・自 棄感」 因子	15	自分はどうなってもかまわない。	0.195					0.603
	30	生きていても仕方がないと思うことがある。	0.294	-0.130		0.224		0.549
	12	何事にも興味がもてない。	0.106			0.241		0.469
因子外 項目	9	決められたことはしなければならぬと思う。	0.349	0.304	0.278	-0.116	0.153	
	16	やりだしたら最後までやらないときがすまない	0.237	0.166	0.398		0.184	
	27	自分でやらないと安心できない。	0.289	0.106	0.379	0.184		0.122
	18	自分より注目されている人を見ると、むかつく。	0.293		0.327	0.374		0.195
	21	誰とでも気軽に話したり、遊んだりする。		0.110	0.340		0.408	

因子抽出法：主因子法（回転：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法）

* 因子負荷の欄の空欄は0.000未満のもの。

(2) 因子の様相

ここでは、因子ごとに因子得点の状況から、思春期の意識のあり様をとらえる。各因子名の後の()は、因子得点の範囲を示している。図1-1~6は、因子得点の分布を示すものである。上段に、全体、校種別(中学生・高校生)、下段に性別(男子・女子)を並べてある。

① 第1因子:「不安・抑うつ感」因子(0点~21点)

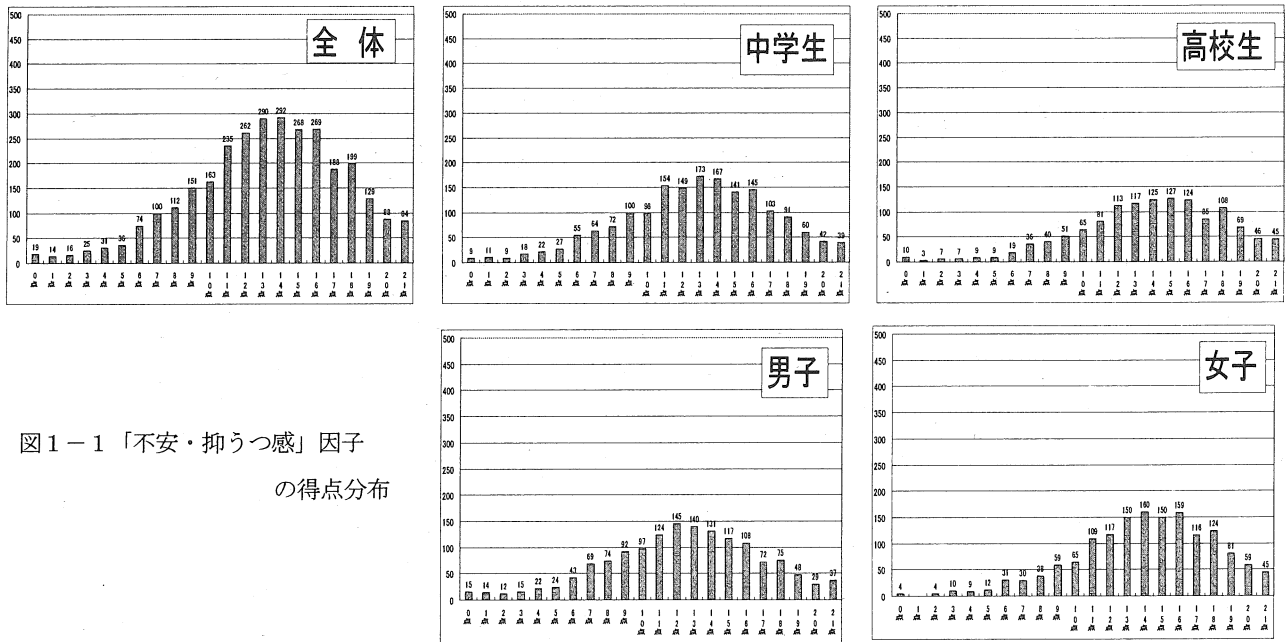


図1-1 「不安・抑うつ感」因子
の得点分布

「不安・抑うつ感」因子の得点分布は、図1-1に見られるように、右よりの山型を示している。全体平均は13.2点で、中点10.5点より高く、全般的に想定したより「不安・抑うつ感」は高い状態にあると言える。校種別に見ると中学生の平均は12.7点、高校生は13.8点で、高校生の方が高くなっている。このことは、中学生よりも高校生の方が、発達的に見て、思春期の課題に直面し、より不安・葛藤を強く感じていると考えられる。また、男子12.3点に対し、女子14.0点と女子の方が高い。

② 第2因子：「家族親和感」因子 (0点～15点)

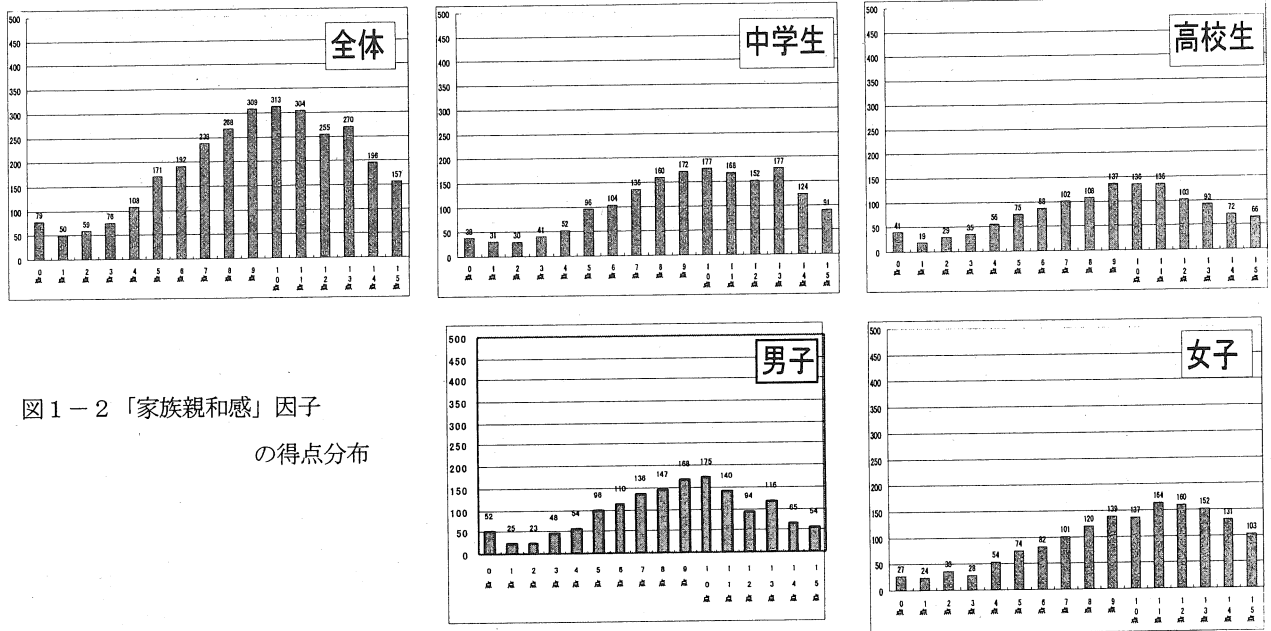


図1-2 「家族親和感」因子
の得点分布

「家族親和感」因子の得点分布は、図1-2に見られるように、右よりの山型を示している。全体平均は9.1点で中点7.5点より高くなっており、「家族親和感」は高いことが示された。全般に家族内の温かな雰囲気、安定感を感じていると考えられる。

校種別では中学生9.2点、高校生8.8点で発達的な差異はあまりみられない。性別では男子8.6点、女子9.5点という結果で、男子よりも女子の方が、家庭でコミュニケーションを取りながら、安心して過ごしている様子が見られる。

③ 第3因子：「自己肯定感」因子 (0点～12点)

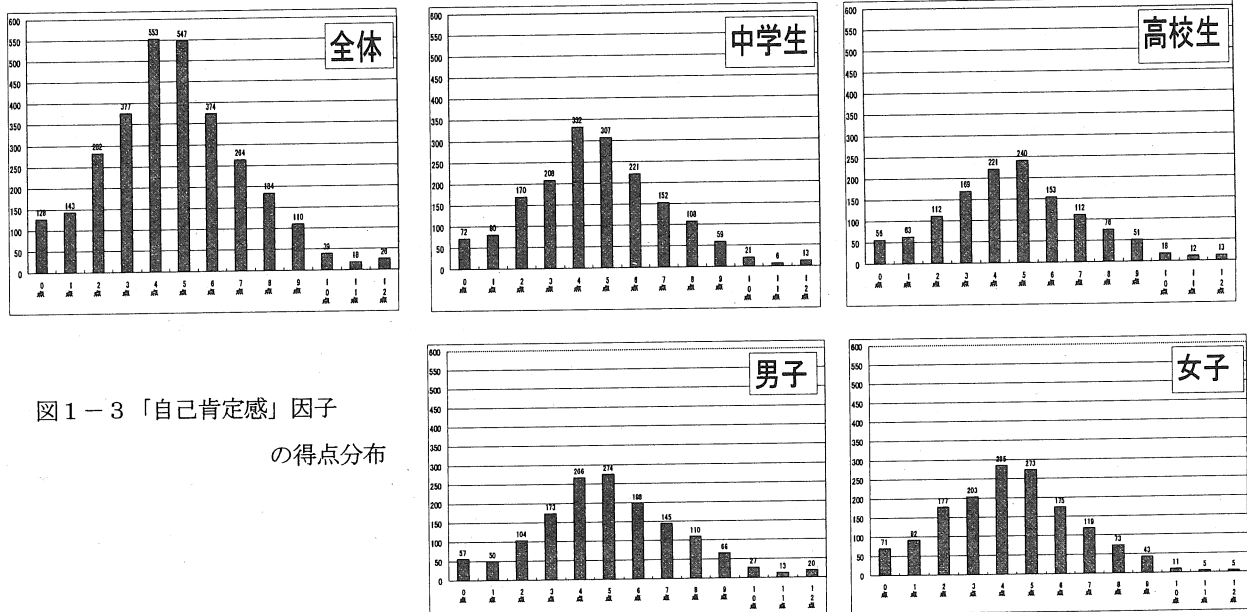


図1-3 「自己肯定感」因子
の得点分布

「自己肯定感」因子の得点分布は、図1—3に見られるように、左よりの山型を示している。全体平均4.7点は、中点6.0点に比べて低く、全般的に「自己肯定感」が低い状況にあるととらえられる。このことは、「日本の子供たちの自信度は低い」¹³⁾ (P.35「引用・参考文献」の文献No.を示す。以下、同様) という調査結果と同様であった。また、校種別にみると、中学生4.6点、高校生4.7点で差異が少ない。また、男子5.0点、女子4.3点で、性別において違いがみられ、男子より女子の方が自己肯定感が低くなっている。

④ 第4因子：「攻撃性」因子 (0点～15点)

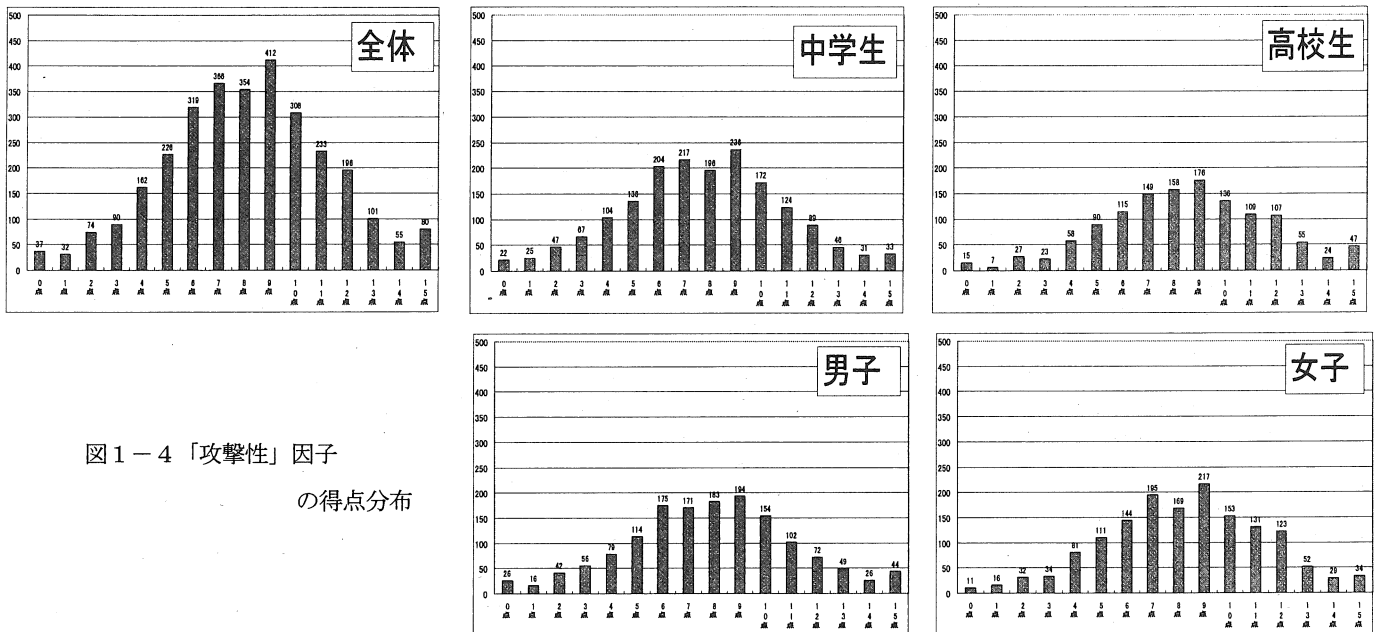


図1—4 「攻撃性」因子の得点分布

「攻撃性」因子の得点分布は、図1—4に見られるように、全体平均が8.1点で、中点7.5点に近く、他の因子と比べて最も正規分布(*注2)に近似した山型を示している。このことは「攻撃性」は一般的な分布で、高いとも低いとも言えないことを示している。突出した値を示す場合には個別に注目することが必要であると考えられる。

また、平均値を比べると、中学生7.7点、高校生8.5点、男子7.9点、女子8.2点となっている。校種に違いがみられ、中学生より高校生の方が攻撃性が高いことが示された。このことは、思春期の自我の確立に向け、次第に自己主張が強くなり、攻撃的な側面が前面に出てくるとともに、合わせてエネルギーが高まっていくことを示していると考えられる。

(*注2) 正規分布の分布曲線は、中央部が最大で左右対称になだらかに裾野をひいて減少していく釣鐘型で、データ数が多い場合は経験的にこの分布を仮定して統計処理を行うことになっている。

⑤ 第5因子：「友だち友好感」因子（0点～9点）

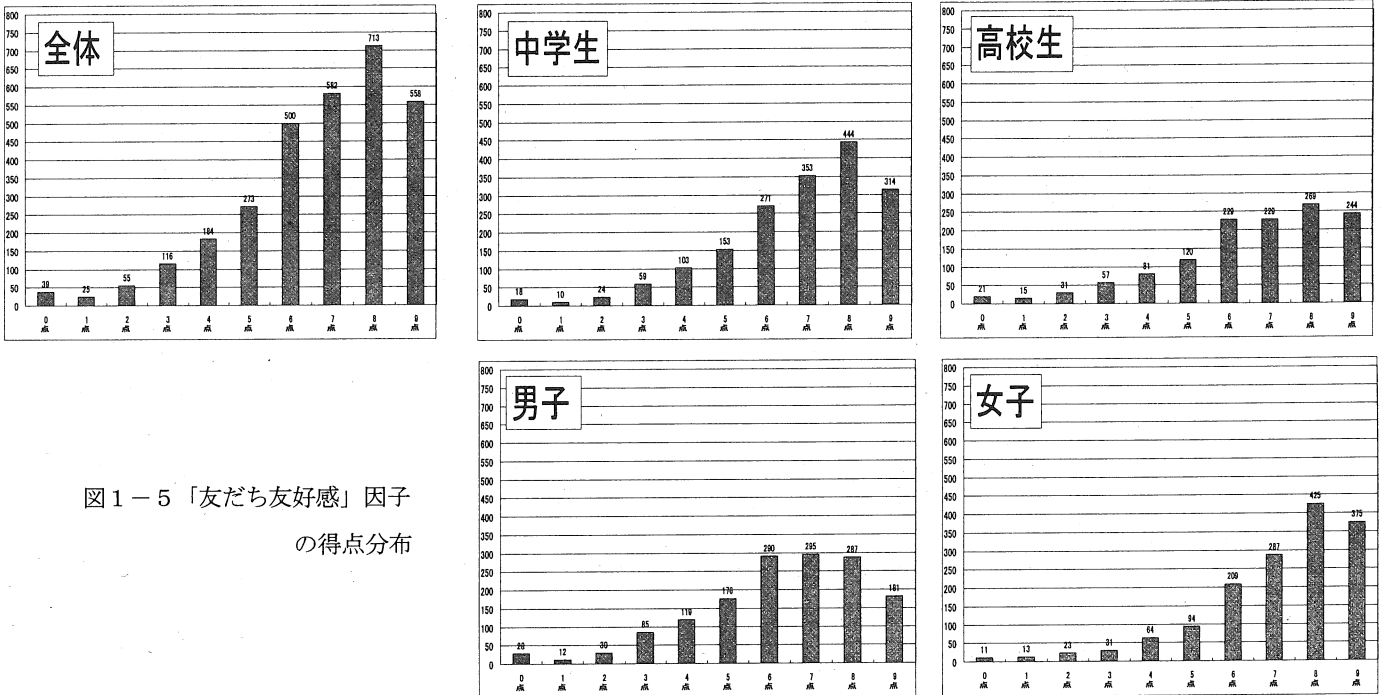


図1-5 「友だち友好感」因子の得点分布

「友だち友好感」の因子の得点分布は、図1-5に見られるように、右上がりの曲線を示している。全体平均は6.7点で、中点4.5点に比べ、全般的に高い得点を示している。平均値を比べると、中学生6.8点、高校生6.6点、男子6.3点、女子7.1点となっており、校種に大きな違いはみられないものの、性別では男子より、女子が高くなっている。このことは、友だち関係については女子の方が、敏感な受けとめ方、とらえ方をしていることが考えられる。

⑥ 第6因子：「自暴自棄感」因子（0点～9点）

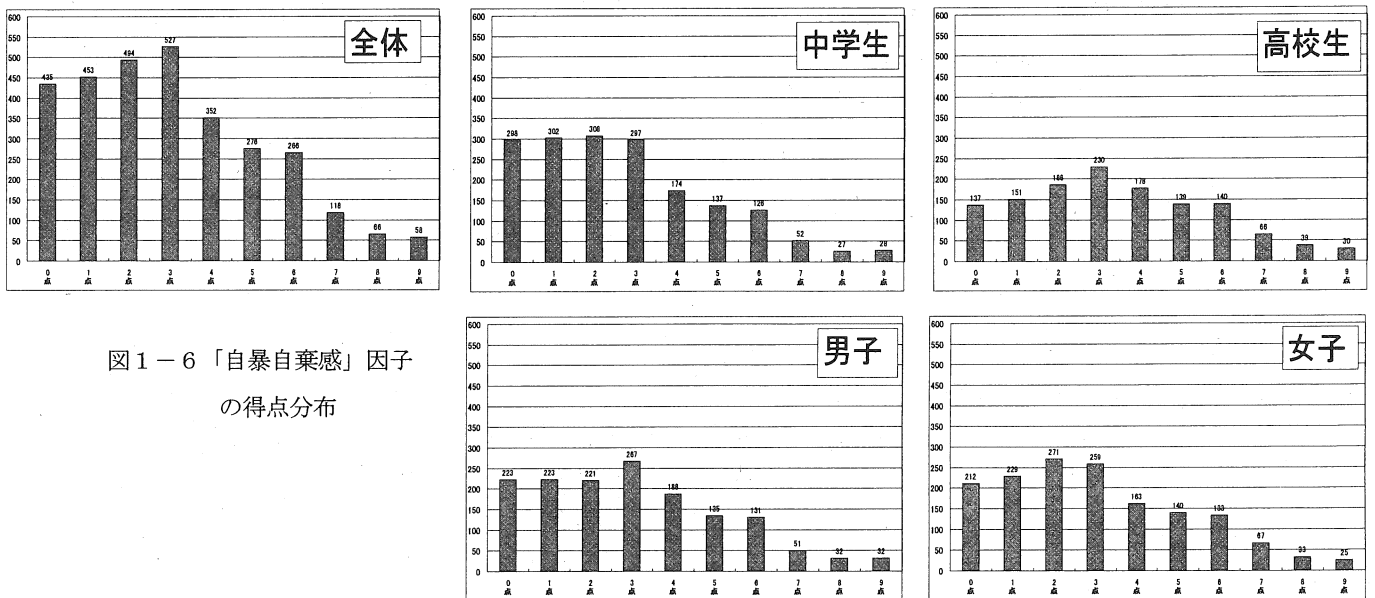


図1-6 「自暴自棄感」因子の得点分布

「自暴自棄感」因子の得点分布は、図1—6に見られるように、右下がり、得点は0～3点に集中している。全体平均3.0点は、中点4.5点よりも低く、自暴自棄感は想定していたよりも低いことを示している。また、平均点が、中学生2.7点、高校生3.5点、男子3.0点、女子3.0点となっており、多くの子供たちは、日常的にはそれほど自暴自棄感を強くは抱いていないと考えられる結果である。校種別で見ると、高校生の方が中学生よりも自暴自棄感が高い。高校生になると、高度な状況判断や解決行動が求められるようになり、その困難さに対して投げやりな思いも高まる傾向があると考えられる。

2 「対処方法」の分析

思春期の子供たちが悩みや不安などに陥ったとき、どのような心理状態になり、どのように対処しているのか。

ここでは、設問Ⅱ「心配事や悩み事があるとき、あなたはどのような状態になりますか。また、どのように行動しますか。」の回答傾向及び特徴を分析した。回答方法は4件法であり、分析に当たっては、肯定的回答(「そう思う」及び「少しそう思う」)の割合を中心に「全体傾向」(図2)、「学年別傾向」(図3)、「性別に見られる傾向」(図4)の3つの視点から行った。

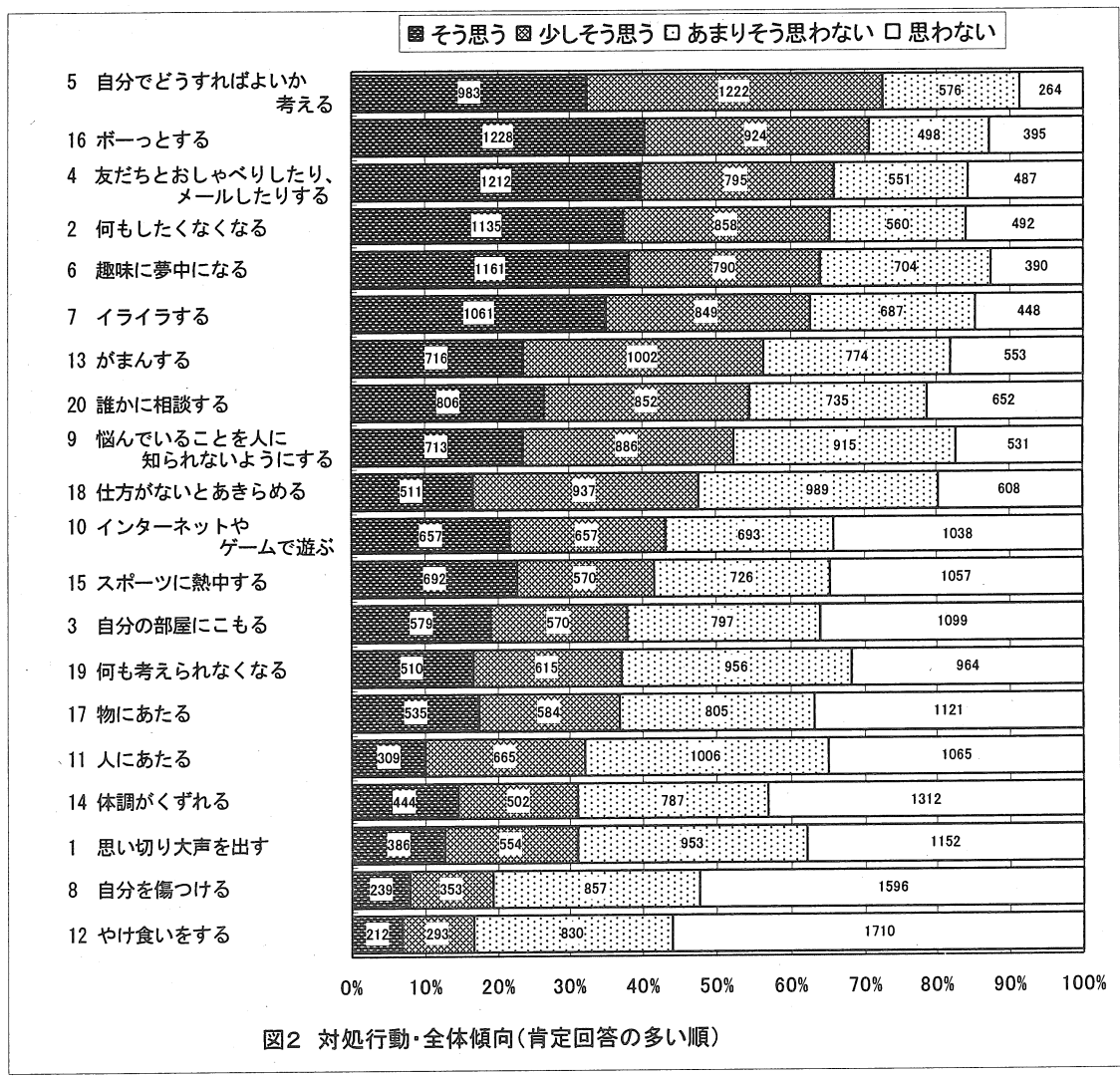
なお、予備調査の結果を踏まえ、本調査では、質問項目を以下の5つの観点から作成し、実施している。

- 解決行動：「No.5 自分でどうしたらよいか考える」「No.20 誰かに相談する」
- 発散行動：「No.1 思い切り大声を出す」「No.4 友だちとおしゃべりをしたり、メールをしたりする」「No.6 趣味に夢中になる」「No.10 インターネットやゲームで遊ぶ」「No.15 スポーツに熱中する」
- 攻撃行動：「No.8 自分を傷つける」「No.11 人にあたる」「No.12 やけ食いをする」「No.17 物にあたる」
- 自己統制：「No.3 自分の部屋にこもる」「No.9 悩んでいることを人に知られないようにする」「No.13 がまんする」「No.18 仕方がないとあきらめる」
- 心理状況：「No.2 何もしたくなくなる」「No.7 イライラする」「No.14 体調がくずれる」「No.16 ボーツとする」「No.19 何も考えられなくなる」

(1) 全体傾向

① 大半の子供たちに見られる対処方法

心配事や悩み事があったとき、「自分でどうしたらよいか考える」に肯定的回答をした生徒の割合は72.1%であり、対処方法の中で最も高い。これは多くの子供たちが、まずは自分なりに考えるという解決行動をとることを意味している。



また、同時に、心配事や悩み事があったときの心理状況として、「ボーっとする」(70.7%)、「何もしたくなくなる」(65.5%)という回答から、呆然自失状態になる子供が多いことが分かる。次いで「友だちとおしゃべりをしたりメールをしたりする」(65.9%)、「趣味に夢中になる」(64.1%)が続き、発散行動を行っている様子が伺える。

② 約半数の子供たちに見られる対処方法

約半数の子供たちが心配事や悩み事を解決しようと「誰かに相談する」(54.4%)という解決行動をとる一方で、自己を統制をしようとし「がまんをする」(54.6%)や「悩んでいることを人に知られないようにする」(52.5%)、あるいは「仕方がないとあきらめる」(47.6%)などの状況になる。

すなわち、約半数の子供たちは、誰かに相談し、支援を得ようとしているが、逆に言えば、半数の子供たちは相談をしない状況にあるということである。その半数の子供の対処方法として、がまんをし、悩んでいることを人に知らせず、仕方がないとあきらめる様相が見て取れる。悩みの内容によってはがまんをしたり、仕方がないとあきら

らめたりすることで、乗り越えられる事態もある。しかし、悩みの深さによっては誰にも相談せずにあきらめる状態が続いたり、抑圧し続けたりすることで、その悩みが潜在化し、追いつめられる状況にいたる可能性がある。

③ 比較的少ない対処方法

対処方法の中で、肯定的回答の割合が比較的少ない行動として、「物にあたる」(36.7%)、「人にあたる」(32.0%)、「思いっきり大声を出す」(31.0%)等の行動が見られる。これは、自分の感情を人や物にぶつけて攻撃したり発散したりして、悩みを克服しようとしている状態である。また「何も考えられなくなる」(36.9%)、「体調がくずれる」(31.1%)等の状態に至るのは3割強であり、心配事や悩み事が心身へ影響を及ぼすと考えられる。さらに20%以下の肯定的回答率であるが、「自分を傷つける」(19.4%)、「やけ食いをする」(16.6%)の2項目については、前者は自傷行為につながり、後者は摂食障害につながる可能性があり、注意を払う必要がある。

(2) 学年別傾向

対処方法を学年別(図3)に見てみると、肯定回答率が中学1年から高校3年まで学年の進行に伴い、徐々に高くなっていくものは、「自分でどうすればよいか考える」「がまんする」、「イライラする」、「体調がくずれる」、「ボーッとする」、「何も考えられなくなる」の項目である。

このことは、一般的に言えば、学年が進行するにつれ、思考力・判断力の向上に伴い、自分で考える、あるいはがまんするなど、意識的に対処行動をとることができるようになると言える。

しかし、一方で、学年が進行するに伴い、心配事や悩み事により、イライラし、体調が崩れたり、何も考えられなくなったりする状況が生まれ、心身への影響を引き起こしやすくなる。

さらに、攻撃行動である「やけ食いをする」、「自分を傷つける」も、中学生より高校生の方が多く回答している。

また、高校1年生のときに最も肯定的回答の割合が高いのは、「自分を傷つける」(30.2%)、「人にあたる」(37.5%)、「物にあたる」(45.6%)である。これは新しく高校生活が始まり、学習面、生活面でこれまでの中学校時代と異なるとともに、新たな集団への適応の問題などが加わり、葛藤が強く、解決方法が見つからず、攻撃行動が増えていることが推測される。

さらに、学年別傾向の差が少ない(差が7%以下)項目を見てみると、「インターネットやゲームで遊ぶ」、「友だちとおしゃべりをしたりメールをしたりする」、「趣味に夢中になる」は、学年に関係なく、子供たちが発散する方法として選択している。

学年の進行に伴い、肯定回答率が低くなっているのは、唯一「スポーツに熱中する」であり、中学生の方がスポーツで発散する子供が多い。

■ そう思う ■ 少しそう思う □ あまりそう思わない □ 思わない

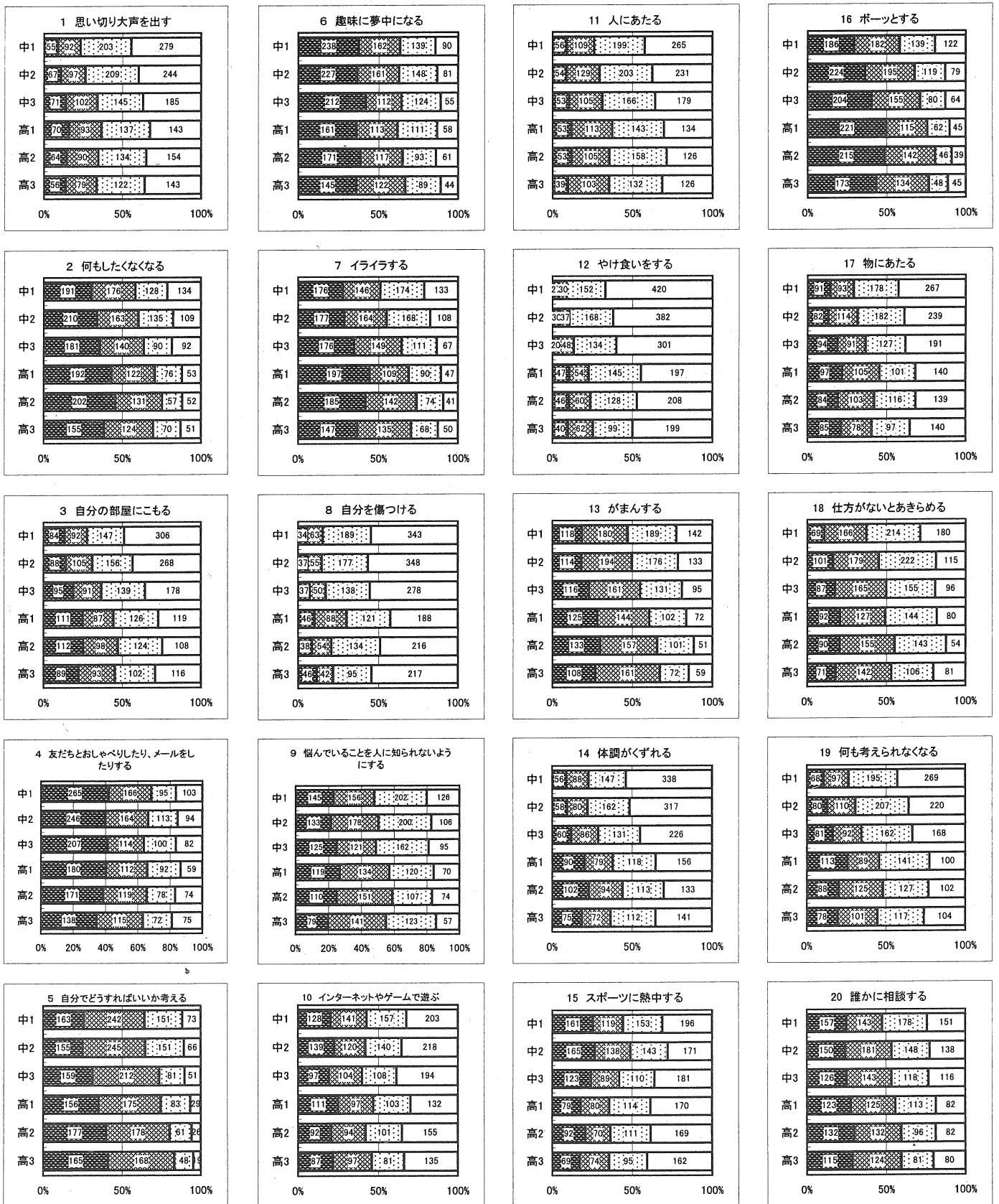


図3 学年別対処行動

(3) 性別に見られる傾向

心配事や悩み事への対処方法に男女に特徴的な違いがあるのか(図4)。男女の肯定的回答を比較してみると、男子より女子の方が、「誰かに相談する」、「友だちとおしゃべりしたり、メールをしたりする」、「人にあたる」に肯定的回答をする割合が高く、解決行動にしろ、発散行動、攻撃行動にしろ、男子より女子の方が対人的な関与による対処方法をとることが分かる。

また、女子は「何もしたくなくなる」、「ボーッとする」、「イライラする」が高く、「自分の部屋にこもる」、「何も考えられなくなる」、「体調がくずれる」等、思考や行動が停止する様子がかがわれる。追いつめられた時に、「自分を傷つける」、「やけ食いをする」などの自罰傾向のある攻撃行動をとりやすいことが推測される。

男子は、女子に比して、「スポーツに熱中する」、「趣味に夢中になる」、「インターネットやゲームで遊ぶ」の肯定的回答率が高く、対人的な関与の度合いは分からないが、気晴らしや発散を行う傾向がある。

■ そう思う ▨ 少しそう思う □ あまりそう思わない □ 思わない

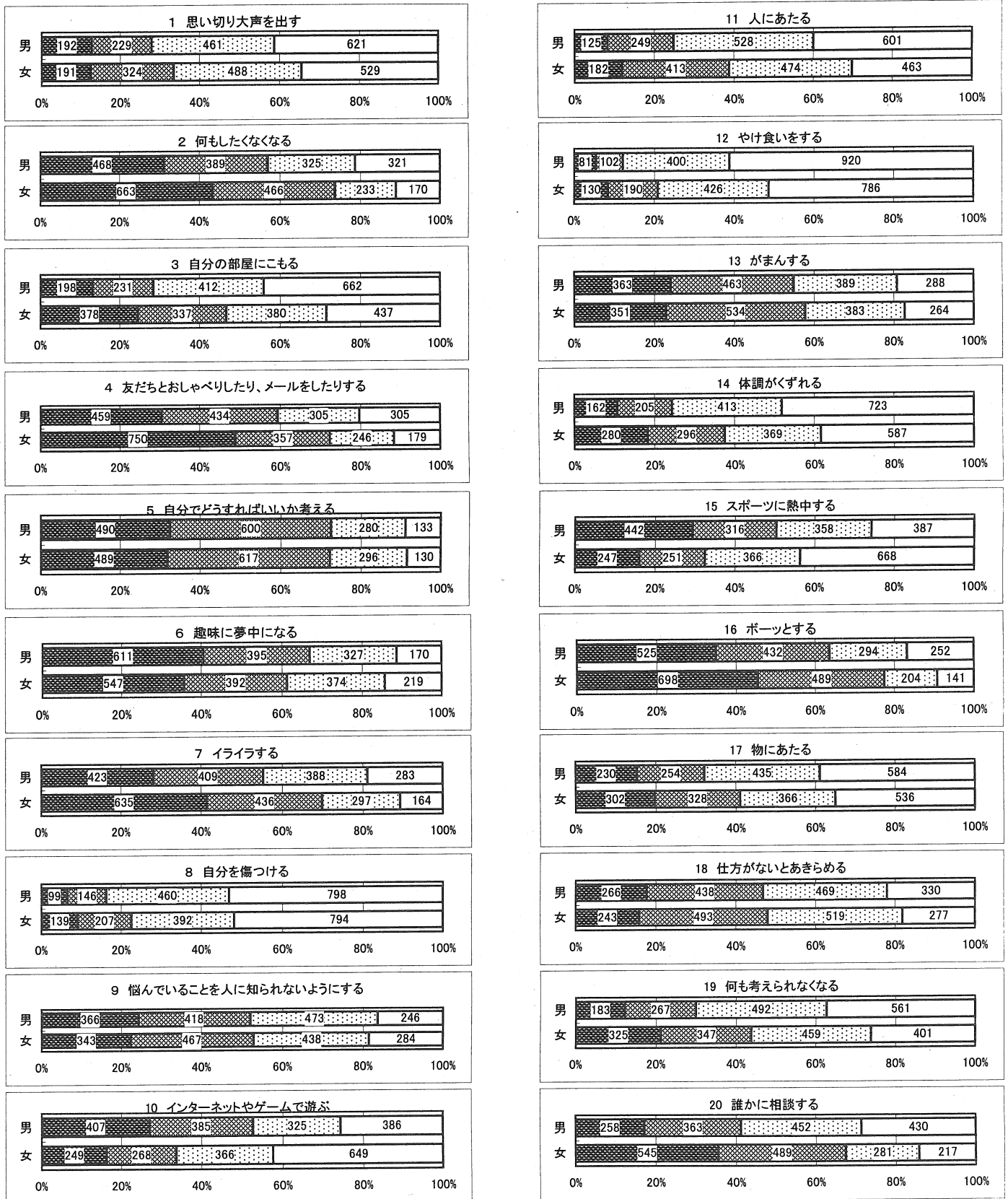


図4 性別に見られる対処行動